

な存在となっている。

こうした「マジョリティでいられる時間・空間」は、日本社会でマージナルな位置に置かれが

ちな彼らにとって、唯一、日本にいながらも日本を排除でき、「主体」としての自分自身を取り戻せる切要な場所なのである。

民間日本語教室における在日外国人児童生徒への支援の現状と課題

岡村 聖子

在日外国人の子どもたちは、自分で必要性を感じなければボランティアが用意する子ども向けの日本語教室（学習補充教室）には通ってこない。つまり用意されている支援の場に出てこないといえる。外国人の子どもは、疎外された家庭環境や、学校における教育支援の体制が不十分な理由により、地域の民間日本語教室に「依存」しなくてはならない現状がある。ボランティアは、地域の民間日本語教室を頼りに、外国人児童生徒が地域社会に適応・溶け込むよう、継続的に努力をしている。ニューカマーの子どもたちにとって、民間日本語教室で学ぶ・交流をするということは、学習面の向上や、学校生活を円滑にする可能性があるというだけでなく、子どもの成長に伴うコミュニ

ケーションの言語能力を身につける意味をもち合わせているといえる。子ども向けの民間ボランティア日本語教室では、地域の事情や、在日外国人が抱える事情、現代の日本社会を理解するうえでも、理解に役立つ場所である。また、子どもへの教育の機会・サービスの提供の場としての子ども向けの日本語教室は、外国人の子どもの「自己表現の場」となり、そして、友人やボランティアとの「対話」（コミュニケーション）を通して、子どもの「精神的な支え」・「学問（意識）向上の場」となっている。そのような民間日本語教室に、積極的に通う子どもへの支援は、長期的向上的支援が必要となる。

在日台湾人女性の生活時間・空間及び社会的ネットワーク

ファンズイン

本論文は在日台湾人女性の生活時間・空間及び社会的ネットワークについての考察である。研究方法としては時間地理学の概念を用いて、生活時間調査の手法で、6人の在日台湾人女性に対して、質的訪問調査を行った。在日台湾人の生活実態や社会的ネットワークの一部を明らかにすることが研究の目的である。

台湾人は中国との政治的不安定、より良好な生活・教育環境を求めるなどの動機で、海外移住する者が多いという。その中、日本に移住した者の特徴は、女性が圧倒的に多く、経済的に依存性が強い。移住の動機として親族の呼び寄せ、国際結婚で移住した人が多いという。

在日台湾人女性は日本に移住し、生活していく過程の中で、いろいろな困難にぶつかる。言葉の壁、就職の困難さ、人間関係の希薄、差別、社会資源の少なさなどに困る人が多い。在日台湾人女性の生活時間の配分は2次活動が一番長く、3次活動はやや短い。生活空間は能力制約（言語、

交通手段）、接合制約（仕事、子育て）、孤立的な社会的ネットワーク（人間関係）などの要素に影響され、家と家の周りの狭い空間となる。

在日台湾人女性の生活空間が広がらない理由は、社会的ネットワークが発達しないことに強い関連性がある。孤立的な社会的ネットワークの成因は、内在要因と外在要因に分けられる。お互いに因果関係になっている。内在要因としては、在日台湾人女性の社会的根とワークを発展させる態度は、消極的・被動的、意欲が低い。外在要因としては、物理環境の厳しさ、社会資源の少なさが考えられる。

在日台湾人女性の生活満足度は日本語のレベル及び在日年度、職場の有無、生活空間の広さ、社会的ネットワークの発達度に影響される。在日台湾人女性の孤立的な生活環境を改善するために外国人政策の充実、台湾人ネットワーク情報の統合・発信が望ましい。